

（様式3）

令和6年度自己評価表

鳥取県立皆生養護学校

中長期目標 (学校ビジョン)	自己の生き方を探求していく人の育成 ～ 未来を生き抜く力を育むことを通して ～	今年度の 重点目標	1. 一人一人に応じた主体的な学びを実現する授業や教育活動の推進 2. 安心・安全、信頼される学校体制の構築 3. 分担と協働、意識改革による学校運営
-------------------	--	--------------	---

年 度 当 初							評 価 結 果 （ 9 ）月		
評価項目	各部	各課	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
一人一人に応じた主体的な学びを実現する授業や教育活動の推進	幼・小学部		夢を実現するために、学ぶこと、人と関わることが大好きな子を育てるための学習環境づくり	○教職員アンケート結果から、「将来の姿をさらに具体化し授業づくりをしたり、保護者と話をしたりしたい」という意見が多かった。 ○昨年度作成したキャリア教育系統表を基に図式化したり、進路が実施する計画に保護者と参加したりする等して、幼児児童の「将来」について考えを深めていく必要がある。	○幼児児童の未来（夢の実現）に必要な力を明確にした上で、学習環境づくりを行ったり、保護者と話をしたりしている。	○教職員が幼児児童の卒業後までについて考えることができるよう、主に進路指導課等と協働しながら学部研修を行う。 ○中・高等部の学習や現場実習の様子を参観することにより、幼・小学部の段階でつけるべき力について明確にする。 ○ねらいや意図を明確にした授業づくりや教室環境整備に努める。 ○週に1回、学習グループで授業等の検討をする際に、将来の姿等を話題にする。 ○保護者と将来について話をする際には、現在の状況や学習のねらい等を根拠をもって説明する。	○夏休みには、多くの教職員が事業所見学をしたり7月の進路座談会の動画を視聴したりして、幼児児童の未来について考えようとする機会は増えた。教職員の間評価でも、「子どもの未来について保護者と語り合うことができた」との回答が多くあったが、教職員同士で十分に語り合えていないとの意見もあった。 ○進路指導課と協働し、学部研修を行った。前期現場実習の事例をもとに、将来のために今付けるべき力について共通理解を図ることができた。	B	○月に1回進路をテーマに子どもたちのことを語る日を設け、将来をイメージした指導の在り方について検討する。
	中学部		生徒が達成感を感じ、学んだことを「～したい」という思いにつなげられる授業づくり	○昨年度、定期的に学習グループの会を設定し、個別の指導計画をもとに、年計の見直しや目標の再確認・共有を行い有効であった。 ○生徒と教職員のやり取りが増えた反面、生徒の主体的な学びの機会を抑制することもあった。より生徒の主体性を大切にした学習を考えていく必要がある。	○関わり合いのある学習を通して、生徒が「～したい」という思いを抱ける授業づくりをしている。	○学習グループでの個別の指導計画ファイルを活用した会と、目標設定・授業計画・改善の会を定期的に設定し、職員間で目標や取り組みの共有を図る。 ○月に1～2回は学習グループごとに授業を決めて主体性を大切にした授業づくりについて、実態把握から授業改善までの検討や共通理解をする時間を設ける。 ○生徒に対し、学習アンケートを年2回（前期・後期）実施し、授業づくりにフィードバックする。	○7月に学習グループの会を設定し、関わり合いの場面や「～したい」と生徒が思える学習づくりについて、どの学習を中心に、どのような工夫をしていくか話し合った。今後、取り組みの振り返り・改善について話し合う機会を計画的にもつことが課題である。 ○生徒対象の前期学習アンケートの結果、学習したことを「またやってみたい」と、どの生徒も感じている。	B	○計画的に学習グループの会ができるように学部の進め方（資料の事前確認、検討・連絡事項の精査など）を工夫し、後半の学習グループの時間を確保する。加えて、今後も学部裁量時間を学習グループの時間にあてる。 ○学習グループごとに前期の振り返りを行い、後期の学習の中でも活動に生徒の興味関心を活かしていくようにする。
	高等部		生徒の主体的な学びを活用した、社会とつながり社会をよりよくする教育の実践	○昨年度、単一障がい学級、重複障がい学級Ⅰ型、Ⅱ型が、ボッチャやeスポーツで他の特別支援学校等と交流する機会を設けた。生徒のアンケートでは、6名中4名が社会をよりよくしているという気持ちをもっていた。 ○教職員アンケートでは、校内外に関わりを広げる活動する機会をもちたいという意見が多くあった。一方、普段の学びや関わりを大切にし、将来につなげたいという意見もあった。	○生徒や教職員が「私たちは社会とつながっている」「私たちは社会に貢献している」と感じることができている。	○自立活動部と連携し、月に1回の学部研修の設定、授業公開・参観の推進を行い、自立活動や教科横断的な学びについての指導力向上を図る。 ○特別支援学校や高等学校等との交流及び共同学習を推進し、どの型も校外の方と関わる機会を設ける。 ○生徒との対話を重視し、生徒が主体的に社会をよりよくしようとする活動を設定する。 ○学部内の他の型や、他学部と生徒同士が関わる機会を設ける。 ○校外学習等の行き先や活動を開拓し、生徒の地域での活動の幅を広げる。	○月1回研修日を設け、自立活動や教科横断的な学びの目標及び内容の整理や共通理解を図った。 ○高等学校と2回、特別支援学校と1回の交流及び共同学習を実施し、生徒全員が少なくとも一回は他校との交流を行った。 ○米子市の街づくりに関するワークショップや就労フェスタでのブース出店等、生徒が主体的に社会づくりに参画する学習を設けた。	B	○学部内や他学部の授業を見学したり、授業公開をしたりして、各教職員の授業力の向上を図る。 ○引き続き高等学校や地域の施設との交流及び共同学習を実施する。 ○前期の学習や地域ふれあい交流の機会をきっかけとして、さらに主体的に生徒が社会参画できるよう、引き続き生徒の思考を大切にした学習を展開する。
		教務課	主体的な学びにあった教育課程の編成	○令和7年度から重複障がい学級の教育課程を変更することは周知しているが、何をどのような手順で検討するのか明確でない。	○幼児児童生徒一人一人に応じた主体的な学びにあった教育課程を編成している。	○課内で、編成する手順や日程、教育課程検討委員会で検討すること等を共有する。 ○教育課程検討委員会で方向性を示し、助言を受け検討事項を明確にする。 ○各学部ごとに何を検討するのか伝えるだけでなく、教育課程の編成に一人一人が関わっているという思いをもってもらえるような伝え方に努める。	○課内で、編成する手順や検討事項を確認することに努め、共有することを大切にした。 ○検討委員会では、提案したことに対して委員から様々な意見や助言を受けたが、時間内にまとめることができず次回に持ち越す議題があった。 ○7月に「教育課程編成に向けて」という全体研修を実施し、毎日の授業に基づき教育課程は評価・改善していくもので一人一人が教育課程の編成に関わっていることを伝えた。その後、学部ごとに検討会を実施した。	B	○事前に資料を配布し、検討事項に参加者に周知する。 ○11月に実施予定の教育課程職員会でも、一人一人が教育課程の編成に関わっていることを全職員に伝える。また、各学部の意見が反映されて編成できたことも合わせて伝える。

一人一人に応じた主体的な学びを実現する授業や教育活動の推進	教務部	情報機器管理課	I C T機器の有効活用の推進	○教育活動や校務において I C Tの活用は進んできた。フォルダ階層構造の再構築や使いやすい機器の整理整頓、保管場所の整備等環境整備も徐々に進んできている。データベースの運用開始し業務の効率化が進んだ。I C Tを活用する上での必要なルールの整備がまだ必要な面がある。I C Tに関する、相談に対して迅速、丁寧を行うことができている。	○教育活動、校務において環境整備（機器の管理・情報共有・業務改善のためのシステムの整備等）、情報発信、提案が行われ、I C T機器が有効活用されている。	○必要な時にいつでもスムーズに有効活用ができるような情報機器やデータの管理と整備を行う。 ○情報やI C T端末等を扱う際の明確なルールづくりを行う。 ○I C T支援員と教職員を結び付けたり、ねらいを持った活用に努めたりすることで、I C Tをより有効に活用できるようにする。 ○教育活動や校務の効率化につながる情報の発信を積極的に行う。 ○I C T活用に関する相談対応において、迅速、丁寧な対応を心がける。	○フォルダ階層の整備や、個人情報の取扱いに関わる規定など明確なルールづくりを進めた。 ○各分掌とI C T支援員を結び付けて、校内研修への参加活用の幅を広げていった。 ○校務の効率化につながるシステムの機能の追加を行った。 ○I C Tに関わる有効な情報を適宜、積極的に発信したり、相談対応において迅速、丁寧に対応したりした。	B	○クラウドサービスの活用の推進のための情報発信等を行う。 ○学習用端末と指導者用端末のさらなる活用の推進のための情報発信等を行う。
		学校行事課	行事を通して人とのつながりを感じたり、もてる力を発揮したりできるような環境づくり	○アンケート結果より保護者に向けて本校の教育活動や障がい理解の啓発を意識して取り組むことが概ねできている。行事において、幼児児童生徒の能力を引き出す指導に専念できる環境づくりに努める必要がある。	○幼児児童生徒が、行事を通して人とのつながりを感じたり自分のもてる力を発揮したりできるよう環境を整える。	○わくわく体験、芸術鑑賞教室では、五感に働きかける活動を設定するとともに、社会人講師と関わることで経験の拡充を図る。 ○わくわく体験、芸術鑑賞教室が単発の出来事として終わらないよう、事前事後学習の提案と掲示の活用を行う。 ○皆生スポレク祭、皆生・ブライト・フェスティバルでは、いろいろな人と触れ合う場面を意図的に設定する。 ○各行事の目標やねらいを明確にして、見通しをもって計画できるよう配慮する。	○わくわく体験では、講師を招いてフラダンスを嗜んだり南国フルーツに触れたりしてあらゆる感覚を刺激する活動ができた。教材や写真などの提供で事前事後学習の呼びかけができた。 ○皆生スポレク祭のアンケート結果は、全体を通して子どもたちが人との繋がりが感じられる活動になったと全員が回答した。しかし、学校行事課の指揮が不十分で役割分担や提出物などについて、職員の混乱を招いた。	B	○今後、わくわく体験や芸術鑑賞教室などを予定しているが、職員が明確なねらいと見通しをもって計画できるよう提案する。
	自立活動部	学習支援課	授業実践に活かせる相談、研修、通信の企画	○研修や自立活動通信から得た知識が、教職員の日々の実践につながり、授業に活かされている。昨年度までに扱った内容を継続して求める意見が多くある一方、認知学習や身体に関することについての要望も複数あり、取り上げて欲しい内容は多岐にわたる。また、優れた実践や工夫をしている教職員が多くいる中、情報提供の場が少ない。	○学習支援課への相談、研修や通信などにより得た知識や情報が、日々の実践に活かされている。	○教職員の要望を受けたり授業へ参加したりして得たニーズについて、分掌内での相談、検討、研修を行い、多くの要望に応えられるようにする。 ○身体の動きに関する研修会を企画する。（自立活動夏季研修会） ○校内の人材を活用した研修や通信への情報提供を通し、本校教職員の専門性の向上を図る。	○摂食指導、プール学習、自立活動等において相談があり、主に授業への参加を通して要望に応じた。 ○自立活動夏季研修会を企画、実施した。参加した教職員、保護者共に肯定的な感想を得た。 ○人材活用の機会はまだ十分ではない。	B	○分掌内で要望に応える体制をとると同時に、人材活用の面からも課の方から指導場面への参加を増やしていく。 ○身体の動きに関して体験的、実践的な研修を企画する。
		授業づくり・研修課	自立活動の「流れ図」の授業づくりのツールとしての活用	○近年、授業力向上を目指して教科学習に力を入れていた。そのため、自立活動の研修の機会が少ない。 ○自立活動の「流れ図」を作成することを通して、個別の課題を整理したり学習目標を設定したりする経験が少ない。	○自立活動の「流れ図」を作成し、授業づくりに活かしている。	○校内研修を通して、「流れ図」の良さや作り方を知る。 ○「流れ図」を使って個別の課題を整理したり学習目標を設定したりする。 ○授業見学や授業ミーティングに一人一回以上参加できるように事前アンケートを実施し、日程調整を行う。	○学習支援課と連携しながら校内研修を実施した。5月には「流れ図」について学ぶ機会を設けることができた。 ○月1回の授業づくり推進日を使って、「流れ図」の作成に取り組んだ。各学習グループで対象幼児児童生徒を決め、「流れ図」を作成しながら、学習目標の設定や見直し等を行うことができた。 ○授業公開に向けて日程を調整した。9月以降に実施する予定である。	B	○一人一回以上、授業見学や授業ミーティングへの参加ができるように日程調整を行う。 ○外部講師や校内の人材を活かしながら、自立活動の授業づくりを行ったり専門性の向上を図ったりする。
	支援部	進路指導課	キャリア教育の推進と進路指導の充実	○キャリア教育や進路指導について情報収集する教職員が増えてきた。 ○昨年度、各学部のキャリア教育系統表の作成を基に各学部におけるキャリア教育について考えを深めた。今後は、将来の生活につなぐ取り組みを充実させていく必要がある。	○教職員が将来の生活と現在の取り組みとのつながりを意識しながら指導をしている。	○卒業生及び保護者や事業所の職員から、卒業後の生活で役立つ力や在学中に身に付けたい力について情報収集する。 ○月に一回は、研修、進路指導通信の発行や施設・事業所見学等をとおして、キャリア教育の視点から将来の生活と現在の取り組みとのつながりを考える機会を設定する。 ○教職員アンケート等を活用し、将来の生活につなぐ取組状況について確認し、今後の取組に活かす。	○進路指導研修会や現場実習の機会を通じて、卒業生及び保護者や事業所の職員から、卒業後の生活で役立つ力や在学中に身に付けたい力について情報収集した。収集した情報は、掲示板で周知したり、進路指導通信の作成に活かしたりした。 ○月に1回、研修やセミナーの開催、進路指導通信の発行を通して、将来の生活について情報を得たり、現在の取り組みと将来の生活とのつながりを考えたりする機会を設定した。	B	○教職員アンケート等を活用し、将来の生活につなぐ取組状況について確認し、情報発信に活かす。 ○キャリアパスポートを活用し、子どもたちの将来を語り合う機会を作る。
		生徒指導課・教育相談課	自分らしい生き方を実現していくために必要な能力や態度を育てる教育の充実	○昨年度、個別の教育支援計画の様式や記載の仕方については整理をしたが、作成後の有効な活用にはまだ課題がある。	○教職員が、個別の教育支援計画を様々な場面で確認したり活用したりしている。	○個別の教育支援計画活用の場面（指導計画・授業計画の検討時、サービス担当者会、現場実習打合せ、学びの場の検討時等）や活用の仕方を適宜伝える。	○個別の教育支援計画活用の場面（指導計画・授業計画の検討時、サービス担当者会、現場実習打合せ、学びの場の検討時等）や活用の仕方を掲示板や終礼等で伝えた。個を語る会や検討会に合わせて呼びかけると活用しやすいため、会での確認事項を提示している教務課との連携が必要である。	B	○教務課と連携し、個を語る会や検討会での確認・検討事項に「教育支援計画の確認」を入れ、活用につなげる。

	インクルーシブ教育推進部	人権・福祉教育課	社会参画、自己実現につながる資質・能力の育成 人権感覚を高めるための取り組みの実施	○実態に応じて社会に参画する上で必要な資質・能力を育て人権意識を育てていく必要がある。 ○自己実現につながる主体的な実践行動を身に付けていく必要がある。 ○近年の社会情勢の変化を踏まえ、様々な人権課題や人権問題に対する職員の人権感覚を継続して高めていく必要がある。	○様々な集団の中で幼児児童生徒が活躍したり、思いや要求等を自己選択・自己決定をしたりするなど、人権が大切にされている経験や学習を重ねている。	○自己選択・自己決定の場を設定したり、個々が活躍する機会を設けたりする。 ○近年の社会情勢を踏まえたテーマで職員研修を実施する。 ○人権教育全体計画を教職員に周知し、学校教育全体で人権教育に対する意識を高め、教育実践につなげる。 ○育てたい資質・能力を年間を通して育成するため、年間指導計画の見直しや活用の仕方について検討する。	○日々の学習や皆生スポレク祭等の行事で幼児児童生徒一人一人が活躍する場を設け取り組んできた。前期の取り組みについて評価を行い、後期の取り組みを検討しているところである。 ○7月に「こどもの人権」をテーマに職員研修を行った。「あたりまえ」や「きつとこうだろう」という凝り固まった視点からこどもの主張や権利を無意識に奪ってしまう可能性があると思った。」等の感想があり職員が人権意識について振り返る機会となった。 ○かかわる職員で共有できるよう、幼児児童生徒の目標や育てたい資質・能力等まとめた一覧表を作成したが活用までには至っていない。	B	○自己選択、自己決定する場や幼児児童生徒が活躍する場について前期の評価をもとに学習内容や活動する場面を再度検討する。 ○11月の人権教育参観日を大きな機会として捉え、年間指導計画に基づいた指導内容で実践できるように働きかける。
安心・安全、信頼される学校体制の構築	保健安全部	保健指導課	主治医、学校医と学校との連携	○医療的ケア、医療情報について、主治医や学校医と連携を持ち、安全な医療的ケアや、的確なケアを行うことができている	○主治医、学校医と学校との連携が、确实、スムーズなものになっている。	○日常的に教職員や学校看護師と幼児児童生徒の様子やケアについて情報共有する。 ○主治医、学校医からの指導助言を、校内で共通理解して対応する。 ○評価については教職員にアンケートを実施する。	○スムーズな情報共有をめざしてデータベース（基本台帳）を活用した。教員間の朝の情報共有を i P a dで行ったり、様子やケアについて日々基本台帳に記録していつでも確認できるようにしたりした。 ○システムへの入力が徹底できていないため、保健室が情報をつかめていなかったこともあった。 ○受診同行や健康相談は、事前に打ち合わせを行い、情報を整理した上で実施し、医師からの指導助言を校内で共有し対応できた。	B	○引き続き、より安全かつ的確な対応が実施できるように関係者と連絡確認を徹底し、事故の未然防止に努める。 ○これからの時期は業務量が増えるが、連携を大切にし、確認しながら計画的に進める。
		給食指導課	「食育」についての啓発	○学校栄養職員の配置により、保護者、教職員への啓発がすすむようになってきている。 ○学校給食週間には、お世話になっている職員の方々に感謝状・プレゼント等で感謝の気持ちを伝えている。	○保護者・教職員が食育に関心をもっている。	○「食育だより」の定期的な発行を行い、保護者に正しい知識や関心をもっていただく。また、掲示することで、教職員や幼児児童生徒も目にするようにする。 ○各学部の学習等での学校栄養職員の活用を促す。 ○評価については保護者・教職員にアンケートを実施する。	○「食育だより」を毎月発行し、保護者・教職員・幼児児童生徒への啓発をすすめた。 ○学校栄養職員が、行事や教科学習に関わる場面が増えた。	B	○「食育だより」を掲示板にのせ教職員に周知し、さらなる啓発につなげる。 ○学校栄養職員の活用を促すために、学期始め等に呼びかけをしている。 ○「食育」についての啓発を給食週間で行う。
		安全教育課	危機管理の徹底と、研修や訓練の充実	○本校の危機管理を理解し、安全、迅速に対応できるようになることは必須である。 ○学校の危機管理の取り組みだけでなく、地域防災への保護者の関心を高めていく必要がある。	○教職員が、危機管理対応について理解し、イメージできている。 ○危機管理、対応について、保護者が関心をもっている。	○避難訓練（火災、地震、津波）を実施し、振り返ることにより改善を図る。 ○保護者に、訓練参加していただく機会を持ったり（地震、津波時の引き渡し訓練）、関連する情報を発信したりする。 ○評価については保護者・教職員にアンケートを実施する。	○避難訓練（火災）、不審者対応訓練、窒息事故対応訓練を実施し、対応についての改善を図った。 ○防災に関する専門家を招き、保護者参加の防災研修会を開いた。	B	○各避難訓練の改善点を検討し、周知する。 ○対応についてイメージが持てるように、フローチャートを作成、提示する。 ○地震・津波対応訓練では、保護者に訓練の様子を見ていただくとともに、引き渡し訓練を行う。 ○資料提供、呼びかけ等により、保護者の防災への関心を高める。

分担と協働・意識改革による学校運営	インクルーシブ教育推進部	交流教育課	共生社会を意識した交流や社会参画の推進	○コロナ渦の数年間、感染症予防のため、外部との交流には制限がある時期が続いていた。現在は感染症予防は終息していないものの緩和傾向が進んでいる。	○教職員が「交流の理解が深まった」「交流の意義をふまえて活動することができた」等、肯定的な回答や感想を持つ。 ○教職員が「交流しやすい環境が整うことができた」等、肯定的な回答や感想をもつ。	○共生社会を意識した交流活動を推進できるよう「インクルーシブ教育について」「何のために交流するのか」など交流の意義を教職員に説明し、意識を高めるようにする。 ○学部や分掌と密にコミュニケーションを取り協働体制を作るためのアイデアや方策などを検討したり、地域での交流を推進するために皆生交流マップ（仮）を作成したり、WECルームを整備したりするなど、交流しやすい環境を整える。	○「インクルーシブ教育」についての研修を行った。研修後に行ったアンケートでは「研修が参考になった」「人との関り、人とのつながりを広げていく取り組みをしていきたい」といった肯定的な回答や感想が9割以上あった。 ○人と関わったりつながったりする手段となるeスポーツや視線入力等の学習の場となる「WECルーム」の整備を行った。eスポーツの機器やソフトについての使用マニュアル、ソフトの紹介ポスター、WECルームを利用している児童生徒の様子を伝える掲示・看板などを作成し、使いやすい環境づくりに努めた。また、WECルームの機器の使い方等教職員が理解し学習につなげられるよう人的環境を整えるために、夏季休業中にeスポーツや視線入力の自主研修を行った。多くの教職員が研修に参加し、実際に機器を使う中で積極的に質問する等行い参加していた。研修後に行ったアンケートでは「これからの学習に活用できる」といった肯定的な回答や感想が9割以上あった。しかし、共生社会に向けて取り組んでいる戦略事業であるバックトゥザフューチャーin KAIKEの「先輩に学べ」では、プロジェクトを行うことができていない。そのため、現在学部内で話し合ったり、アンケートを取ったりして集約、検討を行っているところである。	B	○戦略事業である『バックトゥザフューチャーin KAIKE』の「先輩に学べ!」を推進するために学部内で話し合ったり、アンケートを取ったりして集約を行っているところである。今後先生方からのアイデアをもとにプロジェクトを具現化していく。
			業務の分担と協働等による業務改善	○学級減等による職員数の減少により、従来の学部毎の職員配置を踏まえた分掌体制が取りにくくなり、学部・分掌等の枠を超えた連携による業務の分担・協働がより必要になってきている状況がある。	○各学部・分掌において、業務の分担と協働・連携に取り組んでいる。	○分掌における部（課）の再編を踏まえながら、各学部・部（課）内や分掌間等での連携をより密にし、業務の分担・協働に取り組む。 ○企画委員会、運営委員会等での事案提案の際等に、各学部、部（課）内での事案検討・確認をより図り、チームでの取組を推進する。 ○評価について、教職員アンケート等を実施する。	○行事や他の関係業務等について早目に計画・共有して分担を決めたり、共有DBを活用した情報共有や声のかけ合いなどでの協力ができたりするところもあったが、業務の分担・協働の姿についての共有や分掌業務の精選が十分でなかったり、分掌間での連携が図れているところもあれば難しい場合もあったりした。職員アンケートでの肯定的評価は約6割であった。 ○各委員会等での事案提案する際には、事前に関係者間で共通理解をして進めることについては、職員アンケートでの肯定的評価は7割弱であった。引き続き取り組み、意識の定着を図ることが必要である。	C	○各学部・部（課）での業務の状況を踏まえ、業務の分担・協働の姿を共有し、分掌業務の精選や業務の状況に応じた分掌間の連携をより図る。 ○各委員会等での事案提案の前に、関係者間で事案の内容や会での協議事項等について検討・確認を継続して行うようにする。
	その他	事務部	教育資源及び環境の適切な整備	○特色ある教育活動の支援、施設・設備の老朽化による修繕の必要性または安心安全な教育環境の整備のため、中長期な計画が必要である。	○主体的な学びの実現のために必要な教育資源（人・もの・金）を効果的に調整・調達する。 ○安心・安全な教育環境となるよう施設・設備・教具の整備及び維持・管理を行う。	○予算状況について複数で執行管理し、教職員へ定期的に情報提供を行い、早期に事業効果が発揮されるよう計画的に執行する。 ○施設修繕については、教育委員会で策定された長寿命化計画に併せて、学校内で課題を整理し、優先順位をつけて予算要求する。	○9月末の予算執行状況を10月中旬の企画委員会で報告するよう準備した。 ○施設修繕について、優先順位をつけ7月に予算要求した。必要な修繕について、その都度協議し、優先順位をつけて対応した。	B	○9月末予算執行状況をもとに、今後の執行計画を確認する。 ○修繕については引き続き対応する。また、次年度に向けて必要な修繕・改修を計画的に行う。

評価基準　A：十分達成[100～80%]　B：概ね達成[80～60%程度]　C：変化の兆し[60～40%程度]　D：まだ不十分[40～30%程度]　E：目標・方策の見直し[30%以下]